

市内に設置された雨乞踊り（水波踊）をモチーフにした
モニュメントの一部（三島金子）

歴史探訪 Historia ヒストリア

天に祈りを

―宇摩郡の水事情―

水は米作りの生命線

今から二千年以上前、日本に伝えられた稲作は水を張った水田で稲を栽培する「水稲農耕」でした。それ以来、日本の稲作では、水は極めて重要な資源でした。江戸時代になると、「石高」（お米の生産量を表す当時の単位）などとも言われるように、米は社会や経済の中心となり、農業用水の需要は一層高まりました。

しかし、降水量が少なく、大規模な河川もない宇摩郡の米作りにとって、水不足は慢性的な課題でした。

限られた水を巡って ―村々の苦労―

かつての宇摩郡では、毎年のように水不足が起こり、数年周期で大規模な旱魃に見舞われていました。ただし、水不足の深刻さは村ごとに異なりました。



【川之江村役用記】（明和７年）
正月から６月までの村入用（村内経費）に「雨請五度」とある（写真左端）

江戸時代後期の西条藩の地誌「西條誌」には、同藩領であった宇摩郡十五ヶ村の用水事情が記されています。その記録によれば、津根村などのように川や泉に恵まれた村がある一方、蕪崎村や長田村などでは、水の確保に苦労していた様子がうかがえます。こうした村では、田に小さな池を掘って農業用水として利用しており、蕪崎村ではその数が百四十、五十箇所に達していました。天満村では、この小池に水を得るために十数メートルも掘削したことが記されています。

村々を流れる川の水などを巡っては、円滑に使うための様々な水利慣行が設けられていました。しかし、有限な水を求めて、時には村同士の激しい水争いへ発展することもありました。宇摩郡内の庄屋文書には、当時の水争いの実態を伝える古文書が数多く残されています。

雨よ、降れ降れ。恵みの水を求めて ―雨乞祈祷と踊り―

人々が必死に確保しようとした水でしたが、雨が降らないときは神仏に頼るほかありませんでした。

川之江村の大庄屋が残した『川之江村役用記』や、下柏村の『藤枝家文書』には、「雨乞（雨請）」の文字が頻繁に見られます。嘉永六（一八五三）年は、幾度も雨乞のための祈祷が行われました。また、明和七（一七七〇）年は、五度の雨乞に関わる費用が村内総経費の約四割を占めており、当時の社会において雨乞が強い期待を込められた公的な営みであったことが分かります。

こうした水への渇望は、雨乞踊りという形で現代にも残されています。「水波踊」や「山田井雨乞踊」などには、先人たちの水を求める切なる願いが込められています。

イベント情報

歴史考古博物館 - 高原ミュージアム -

問 28-6260

宇摩向山古墳一般公開 ¥0 FREE

国指定史跡である宇摩向山古墳の横穴式石室を公開します。

期間 11/22（日）10:00～15:00
（最終入場 14:30）
※ 11:00～11:30 学芸員による解説

場所 宇摩向山古墳
（金生町下分乙 18-2）

【ミニ展示】

下分馬木遺跡第二次調査地発掘調査報告書刊行記念展 ¥0 FREE

発掘調査報告書が刊行されたことを記念し、関連資料を展示・紹介します。

期間 11/7（土）～1/10（日）
9:00～17:00（最終入館 16:30）

場所 歴史考古博物館

詳しくはこちら▶